史林
第十二卷 第三號
昭和二年七月一日發行
（通卷第四十七號）

研究

ソフィストと其の時代（上）

文學士 原隨園

一 序說—波斯戰役後の世相とソフィスト

ソフィストの思想を、アテナイの最も興味ある紀元前五世紀の生活と關係せしめて、彼此考察する事が此の小篇の主題である。從つて、個々のソフィストに就いてではなく、ソフィストと呼ばるゝ思想家は、一群として取扱はれる。

ペルシャ戰役はギリシャの自由戰爭であつた。專制的なる東方主義から、偏狹なりしポリスの孤立的生活から人々を解放した。貴族的な階級心から平民を解放した。更に神より解放して人間の力を自覺せしめた。民主政治も是より勃興し、海上への發展も是より盛となる。科學も亦人間を對象とする機運となつた。Anthropologisch な時代と

稱せらるゝ所以である。

人は萬物の尺度であるといふプロタゴラスの言葉は、その人といふ語が個々の人を指すか或は概括的に人間を指すかといふ辨證は暫く措いて、(1)知識を外界にでなく自己に、神にでなく人間に、立ち歸つて求めた所に意味がある。凡てを人間に還元した所に、時代の鮮明な姿を看取する事が出來る。ギリシャ人の生活は戰後において、平等なる又自由なる、人間として享樂され樣として來た。

教養についても、一つの學問をではなく、完全なる人間としての成長をであり、世間なみの教養ではなく、特定の個人の各々長ずる所に從つての生成發育を求めた。深くなくとも多面的であり、現世を離るゝのではなく實生活に根强く喰ひ入ろうとする。

ソフイストヒッピアスは數學幾何學天文學、音韻學音學、美學史學に通じ又記憶術を說いた。最も多面的な人であつて恰も文藝復興期の天才や十八世紀の百科全書家を回想せしめるものがある。(2)多面的な天才の出現は世相の一變せんとする黎明期に見る現象である。ペルシャ戰役の半世紀は、ギリシャ文明の啓蒙時代である。

然しヒッピアスは、トラキアの女に嘲笑されたタレスではなかつた。徒らに天上を仰視して足下を忘れ、陷井の笑を殘す自然哲學者ではなかつた。(3)彼ヒッピアスは、盡く手製にかゝる衣裳を纏ふてオリンピヤに現れ、韻文散文各種を發表したのである。(4)文藝の各方面への卓越を示す意志は明かであるが、それよりも重大な點は、實生活の必需品についても深き注意と限りなき能力とを物語る事である。そして實生活への興味が加はつた事と同時に、自己表顯の强い意圖が働きかけた事とが認められる。

プロタゴラスは公生活と私生活とを問はず、何

れの方面についても指導する、そして日一日と進歩發展せしむると稱した、(5) 是れ亦實生活に向つて個性を敎導開發する事を意味する。

人々の志す所は傳統の修練琢磨ではない。力の創造と發揮とであつた。一般世俗の敎養ではなく、自己の優越せる領域の開拓であつた。多面的なると同時に、十分なる自己開發、それがペルシャ戰役の一つの著しき世相であつた。

ペルシャ戰役以前には、門地と富と敎養とは trinity であつた。サラミスの海戰にギリシャを救つたアテナイの民衆——ochlos naukratikos と呼ばれた—に「最も美しき名の平等 isonomia(6)」が與へられた。然し彼等は門地なく富なく、從つて又敎育に缺くる所があつた。彼等が敎養ある在來の市民の間に伍して進むためにはそれだけの敎養を必要とした。敎養、それは單なる學術の謂ではない。有德なる、善且美 Kaloskagathos なる市民に到達する事であつた。宇宙の生成ではなく、德と正義との究明と、之を獲得する手段とが、主題であつた。自然哲學、又單なる心 nous の考究ではなく、倫理の問題敎育の問題が痛切なる實際問題であつた。

ソフィストは、ヘレネスの前に、學術の研究者としてではなく德の敎師、敎育の師範と公言して出現した(7) 而してそれは單に一都市、一國家の敎師ではなく「全ギリシャ共通の敎師」であり(8) 自ら「人類の師」(9) だと號した。

人の各々長ずる所を助長し、一個の人間として實生活に送り出さんとするのである。誠にギリシャ啓蒙期の時代相は、ソフィストに體現されたといつてよい。ソフィストは飽くまで人間的敎養と實生活への訓練指導とを事とした。それ故に時代精神を卒ゆると同時に時代と共に移動する。今は彼等が如何に時代に働きかけたか、又時代から如

何に呼びかけられたかに就いて、「法」を中心として考へて見たい。

(1) 「人」を概括的に見樣とするのが Gomperz である。大體の傾向は「個人」と解釋して居る樣である。然し進んで彼が「個人主義者」であつたか否かについては異說がある。Barker の Greek political theory の如くである。自分は彼の思辨がなほ「個人」か「人全體」かの區別に到らない、唯客觀的知識の實在に反對した言葉とのみ解釋しは如何かと考へる。然し彼の末流はプラトンに見ゆる如く個人主義的立場に發展したものと思惟する。(2) Gomperz, Griechische Denker I³ s. 347 f. Burckhardt, kultur d. Renaissance in Italien にも多面的天才の出現を說いて居た樣に記憶す　((3) Platon, Theaitetos 173-174. (4) 〃 Hippias II. 368 (5) 〃, Protagoras318 (6) Herodotos Ⅲ ≧ So (7) Plat. Prot. 348 (8) 〃, Menon 91 (9) 〃, Prot. 317.

二　ソフィストの名稱と不評との吟味—彼等と時代

啓蒙時代に活躍せる一群の思想家、卽ち hoi sophistai は、思想的に截然たる一派を成して居るのではない。之に通ずる批評を企てる事は從つて困難である。幾多の類似點を有すると共に、幾多の差違も存するからであり、年月を經る間には又自ら發展といふ事が豫想さるべきであるから。

ソフィストといふ文字の使ひ方は極めて曖昧であり、廣狹何れにも用ひられた。プロタゴラス、ゴルギアス、ヒッピアスの亞流のみではなく、ヘロドトスに據ればピタゴラスもソフィストであり(1)アリストファアネスの中にはソクラテスも亦その一人と考へられて居る(2)ヘロドトスや悲劇に於ては道德的評價を離れ單に發明家といふ樣な意味に用ひられたといふ。(3)

吾々はプラトンやクセノフォンやアリストテレスやイソクラテスによつて、哲學者とは區別され概して之とは反對の傾向を有する人々として批難されるを見る。彼等四世紀の批判者は、恐らく彼等の時代における反對者を攻むるの故に、彼等自

ら多大の影響をうけて居るにも關らず、その源流たる大ソフィストをも併せて批難したものと思はれる。而も吾々は彼等の引證によつてのみ纔にその學說が保存され、之によつて覗ひ得るにすぎないものもある。斯にソフィストについての誤解を生ずる一つの原因が潜んで居る。

又ソクラテスはアリストファネスに喜劇化されて取扱はれた事を「辯解」の中にのべて居る。偶々此の事は、アニュトスやメレトス輩には、凡ての天才が、その傾向の如何に關らず、凡俗と區別されてソフィストと呼び慣はされたる事を示するものではあるまいか。然らば卽ち一方に於て、四世紀の反對學說に加へられたプラトンなどの批難を、五世紀の大ソフィストに直ちに移して批難を加へる嫌ひがあると同時に、他方では、五世紀に行はれた、凡庸な常識から下された批難に災さるゝ憂もある。恐らく是が Grote の出るまでソフィストの本體が堅き謬見に鎖されて居た理由であつたろう。

元來ソフィストなる名稱は、始めから餘り好い意味に用ひられて居なかつた。プロタゴラスは、

「ソフィストの術は予の信ずる所では極めて古いのである。然し昔は之を行ひ乍ら、反感を恐れて種々の名の下に變裝した」(4)

といつて居る。而してプロタゴラスは自ら堂々とソフィステスと名乘り出た事を得意らしく語つて居る。(5) 之によるとソフィスト者流も一般にはソフィストたる事を名乘らなかつたらしく、プロタゴラスがかく公稱した事を得意にするだけ、それだけ好もしからぬ名であつたろう。後に到つてもなほ彼等は、ソフィステスとレトル rhetor とを區別して、ソフィステスはいけないがレトルは完全なものだと唱へた。それをソクラテスは畢竟內容は同じであるに過ぎぬと見て居る(6) 如何にかし

てソフイスト呼ばるゝ事を回避し様とする心持を吾々は之等の事例によつて感知するのである。

かくソフイストが始めから餘り好い意味に用ひられなかつたのは何故であるか。それには色々の理由がある。そしてその理由は何れも時代の姿を如實に示して居る様に感ぜられる。今試みに批評を加へつゝそれを擧げてみよう。

第一、新奇な言説を企てた事。

アリストファネスの「雲」に描かれたソクラテス卽ちソフイストは在來の信仰とは異りて雨を降らす者はゾエウスではなく雲であるなどと說く。(7) そしてかゝる新奇な言說がソフイストに向つて求められたものと思はれる。ゴルギアスは、久しく珍らしい質問に出逢はないと不平を言つて居る程である。(8)

新らしき說をなし傳統的信仰に從はないといふので瀆神の罪がソクラテスやプロタゴラスの罪さ

れた理由の一つとなつて居る。(9) 新奇な言說は人々から確に快く思はれなかつたに相違ない。然し吾々は同時に五世紀後半のアテナイには新しさを追求する情熱があつた事を思はねばならない。

「進む者、新人、傳說を侮る者が、眞の、唯一の賢者として支配する」(10)

「急激なる變動のみが何か新らしきものを作り得る」(11)

といふ喜劇の言葉の中には、好奇心の熾烈なる事が感ぜられる。だからソフイストが新奇な言說のために批難されたのであるとすれば、それは偶々彼等が五世紀における民衆の情熱の一面を代表した事に他ならない。此處にもソフイストと時代との相關がある。

第二、報酬をとり、多大の蓄財をもなしたる事。

プロディコスは五〇〇ドラクマの聽講料をとつたし(12) 又プロタゴラスは天才彫刻家フイディアス程の資產を作つたといはれる、(13) 彼等が報酬をとつ

た事がプラトンの隨所に侮蔑的に特筆されて居る。

在來の哲學者は研學のためには家產をも蕩盡した。或は富を獲得する程の先見があつても敢えてそれをしなかつたのである。キオスのヒッポクラテスや、タレスの如きはそれである(14)。清廉な學者的態度からみれば、ソフィストは俗惡とされたに相違ない。

名聞と利益とを求むる事は、當時の人々の究極の目的であつた。プロクセノスの如きもそのためにゴルギアスに束脩を捧げて居る(15)。かく名利を追求する者の存在する一方には此の名利を貪る事の弊害を認めて之を批難し、あらゆる罪惡の根源は名聞 (Philotimia) と利益 (Philonexia) の欲求に在りとする者がある。吾々はかゝる思想を當時の作家の隨所に發見する(16)。

德を敎へる者さへも報酬を要求した事は時勢である。職業分化の新時代の特色として、又市民の義務であつた國防さへも職業化せんとする時代に於て、又書齋より街頭へと出動した當然の歸結として、それは或は敢えて批難するには値しなかつたではなかろうか。然し由來富に對する反感、富者に對する迫害の傾向があつた(17)。之と共に前述の如き名利欲求を指彈する者は、かゝる妄念を助長する者としてソフィストを攻擊した。吾々は此の攻擊された點につき、攻擊した理由の中に反つて時代の一面を認めうると思ふ。

第三　貴族の子弟を敎導したる事

例へばプロタゴラスの滯在せるカリアスの家はアテナイの最も名譽ある大家の一であつた(18)。そして莫大なる金をソフィストに支拂つて居た(19)。

是等の貴族等は、極端民主政治から迫害を蒙つたのであつた。ソフィストはその子弟に雄辯術を敎へた。雄辯術は實に「法廷に於て人を救ふ所の術」であつた(20)。

當時「アテナイの民衆は地上の神である」[21]とか「吾等の權力は如何なる王よりも少くはない」[22]と稱せられた。アテナイには「王なる民衆」(Demos Tyrannos)といふ言葉の生ずる程民衆は勢を得た。貴族達は、かくの如く高まり行く民衆の勢力とその不法なる抑壓に抗辯する手段を講ずるのが自衞上必然な事であつた。殊に、職業的な三百代言(Sykophant)が種々人を惱ますので法律は頻りに之が取締りをして居る程であつた、富豪は殊に困惑した。Kriton が Archedemos をなづけて、彼等の難を免れた話も傳はつて居る、[23]かゝる民衆の不法から免るゝ道としては、「法廷に於て人を救ふの術」を學ぶが好い。是れ貴族がソフィストを要求した理由であつた。ソフィストが雄辯術を敎へた事その事が批難に値したのではない。むしろ貴族と交る事が民衆より快く理解されなかつた所以である。ソクラテスは工人 demiourgoi 及市民の敵

であると訴へられて居るのを參照すべきである。

吾々は此の批難の内に民衆の超梁、卽ち五世紀末のアテナイにソフィストの出現を促した事情の一面を見逃しがたいと思ふ。

第四　青年を刺戟した事

若きテアイテトスはプロタゴラスの書を反復熟讀したと言つて居る。[24]プロタゴラスは敎育を目的とし、而も青年は沼々として之に憧れたのであつた。[25]オリンピアなどの競技勝利者が國家より優遇さるゝの不當をならし、賢明なる者をこそ然かすべきであると既にクセノファネスは述べて居る。[26]其處に既に知識の尊重、愛智、求智の熱情の溢るゝを見る。かゝる傾向に培はれ、知識慾にもゆる青年はソフィストと會談する事を樂んだのである。

ソフィストは彼等青年を日一日と善くするといひ、ゴルギアスの如きは、青年に向つて、汝等に

教を授ける市民達は何物をも與へはしない。直ちに去つて吾等の下に來れ、といふ樣に說いたらしい[27]かくの如きは一部人士の排斥をうけ、別して舊道德を敎ふる者、之を信ずる市民達の反感を買つた所以と思はれる。アニュトスは、ソフイストを以て靑年を腐敗せしむるものとした。[28]

吾々は此の點については、アテナイ靑年の間に好學の精神の勃興せる事を認め得ると共に、此の點についてソフイストの批難さるればさるゝ程、彼等が新時代の形式に重大なる地步を占むる事を思ふ者である。

第五　ソフイストの多くが異邦人なりし事

プロタゴラスはアブデラの人、ゴルギアスはレオンチノイの人、ヒッピアスはエリスの人、プロディコスはコスの人、エウエノスはパロスの人である。之は注目すべき事である。

彼等は諸方の國々を巡歷して步いた。學者の遍歷、それは既に前代の哲學者の行動にもみゆる所で珍らしい事ではない。例へばアナクサゴラスがアテナイへ、其他パロメニデスもツエノンも何れも巡歷傳道して居るのである。[29]

而してアテナイはヒッピアスの言つた樣に知識の中心であつた。[30]又アテナイ程自由に言論の認められた所は全ギリシヤにはなかつたのである。[31]そして門戶を開放して外邦人に寬大なる事はアテナイ市民の一つの誇でもあつた。[32]だから彼等遍歷の學者にとつて、アテナイは全く安住の地であつたろう。

かくの如く都市から都市へと巡歷して宣傳する限り、その思想の內容は限られたる國、限られたる歷史に妥當するものであつてはならない。思想內容に普遍性が要求されて來る。又異邦人たるがために傳統と歷史とに對して冷靜でありえたであろう。先入觀念に捕はれざる批判の可能なりし原

因が潜んで居る。是こそ實に Griechentum に對するドグマ的信奉から人々を解放する所の極めて意義深き胚種であつたのだ。異邦人なりければこそ一つには歴史否定主義に向つて躊躇する處なく進みえたのであろう。

かくては然し都市國家の愛國心とは相容れない。都市國家の歴史とは牴觸する事を免れない。彼等の迫害は、唯に異邦人を忌む理由のみからではなく、それに胚胎する此の超歴史的な思想的立場からも迫害が加はつたものである。

以上略説した樣に、ソフィストは最初からアテナイ人の反感を蒙つて居た。プラトン達が自分達と別流の者として斥けたのも由つて來る所がある。プラトンの如きは、自己の理想を托したソクラテスに對し、恰も人間の正しからざる偶像の如くにソフィストを描寫して居る。

然し乍らソフィスト迫害の裏面には、吾々の考

察し來つた如く、意味深長なる時代の呼吸が感せらるゝ。ソフィストは、マイヤーの言つた樣に、個人が作り出したのでなくギリシヤ文化發展の必然的生産であつたのである。(33) ソフィストを個々についてではなく、全體として變化を眺むるならば、そこに彼等と時代との相關から、五世紀後年のアテナイ社會の大勢も闡明される所があろう。

（註）

1. Herodotos IV. 95.　2. Aristophanes, Wolken.
3. Jowett, Platon 譯 Sophist 序　4. Platon, Protag. 316
5. ibid, 〃 316, 348.　6. 〃 Gorgias 520.
7. Aristophanes, Wolken　8. Plat. Gorg. 448.
9. Plat. Apol. 26.
Burnet. Greek Philosophy § 89. には Protagoras が説神明で處罰されたとの説を否定してゐが、再考の餘地を存すると思はれる (cf. Diogenes Laertios K 55-56)
10. Aristophanes, Ekklesiazonsai, v. 566.　11. 〃 〃 v. 450.　12. Platon, Kratylos 384.　13. 〃, Menon, 91.　14. cf. Meyer, ges. d. Alt. IV. § 516.
15. Xenophon, anabasis, III 6 § 16.　16. 〃 〃

Ⅲ 6, § 21. Thukydides, Ⅲ 82. Plat. gorg. 508 等
17. Aristoteles, Politics. 1305 a. 18. Plat. Protag. 337.
19. Plat, Apol, 20. 〃 Kraty. 391. 20. 〃 Gorg. 551.
21. Aristophanes, Wespen. v. 620. 22. 〃 〃 v. 549.
23. Xenoph. Mem. Ⅱ 9. 24. Plat, Theaitet. 152.
25. Xenophanes (Diels, Vorsokratiker, fr. 2)
27. Plat. Apol. 19-20. 28. 〃 Menon. 91.
29. Meyer, ges. d. Alt. Ⅳ. § 517. 30. Plat. Protag 337. 31. 〃 gorg. 461. 32. Thukyd. Ⅱ 39.
33. Meyer. Ⅳ. § 522.

三　性質の變化——德より支配へ……

教育より雄辯へ

プロタゴラス自身は最も完備せる雄辯家と稱せられ、人々を雄辯ならしむる術に長じて居た。(1) だから辯論に始めから無關心なものではなかつたが(2) 然し本來の目的は德の教授であつた。政治の術を教へ、善き市民たらしむる事それこそ正に我が職業だと彼は答へて居る(3)

元來ギリシャ人の生活は現世的な傾向を著しく帶びて居て萬事政治的活動といふものからは切り離されなかつた樣である。

七賢人が海中から出た三脚器をお互に讓りあつたといふ傳說によると、初めデルフォイの巫女は之を讓るに「最も賢明なる者へ」と託宣して居る(4) 「最も信心深き者へ」ではない事は注意を要する。現世的なギリシア人の性向を示す一挿話である。

此の七賢人の中で、(七人の數へ方については色々あるが) その中で動かないソロンやピッタコスは立法家であり、タレスが之に加へられたのも實は政治的活動に由來するとさへ推定されて居る(5) 蓋し當を得て居る解釋であらう。何故なら「賢明」といふ事は何を意味するかといふに、一つは政治的技能 (deinotēs politikē) 二つは卓越せる理解 drasterios sunesis を指したのであつた。(6) 從つて賢者とは卽ち政治的技能の理解者でなければならなかつたから。

ソフイストのプロデイコスは賢者 (ho sophos) と稱せられて居るから(7)賢者 (sophos) もソフイスト (Sophistes) も同樣な意味をもつと考へられる。プロタゴラスが始めてソフイストと名乘つた趣旨は、やはり「賢明」が初めに意味されたと同樣に、政治的技能とその卓越せる理解とを持つ事であつたらう。彼がソフイストと稱する限り、「自分の目的は政治の術を敎へ公私の事何事でも敎へる」と稱したのは不當でもなく又僞瞞でもなかつたであらう。ソフイストの職分は最初はかくの如くであつた。

時を經るまゝに性質に變化を來すのは免れない。

ゴルギアスは辯論を重んじた。「自分を雄辯家と呼んでも好い」といひ(8) 又決して「德を敎へる」とは約束しなかつた。「他の人が若しそういふ約束をする時は彼は唯笑つて居た。そして話す事を學ばねばならぬと言つた」そうである。(9) 此の話の含む一つの意味は、プロタゴラスの宣言した如く、德を敎へる事がソフイストの目的であると、一般には信ぜられて居た事である。然しゴルギヤスに於てはそれが明かに主眼とする所ではなくなつて居る事、それが此の話の含む第二の意味である。卽ち彼に於ては授業の目的が單なる話術に墮して居る。ソフイストは雄辯術を敎へるものとなつたのである。

ゴルギアスによれば rhetoric とは法廷に於て人を救ふ所の術であり(10) 窮極は人を說得する事を目的とした(11) 卽ち法廷に於てその他の會議に於て正と不正とにつき說得する術だと考へられた(12) 此の人を說得する術は他の凡てに優る。之は恐らく最善のものであらう。凡ての者が强ひられずに心からそれに從ふからであると彼は語つた(13) それ故にゴルギアスの意味する rhetoric は單なる話術以上に意味をもつ。

rhetorikē とはゴルギアスによれば、人事の最大

最善の事に關する話術である。その最大最善とは人々をしてその身を自由にし、各人には各その國に於て他を支配する力を與へる事であるといふ(14)

自由といひ平等といふは民主政治の眼目であつた。

法の前に平等だといふ思想は、既にクレイステネス以前に歌はれて居る。(15) 然しヘロドトスが「人民は凡てに於て凡てゞある」(16)と言つた言葉は、「平等」を意味する以上に或權力意志の濟るのを感ずる。

ペルシャ戰役に勝利をえた歡喜の心はヘロドトスにも顯はれて居るが、プラティアの野に自由のツエウス Zeus Eleutheria を記念した祭も注目される。それはプルタルコスの頃までも存續したといはれる程(17) ペルシャ戰役の自由の意味深き紀念祭である。ペルシャから自由になつたといふ事その事が當時のギリシャ人にはそれ程非常な歡びであつた。然るに戰後には勝利感が高まり來つて、自由についても、「自由」以上、「解放」以上に支配的欲求を高め來つた。何者にも支配されない事、それがギリシア人の初めからの誇りでもあるかの樣に、奴隷の名は外蠻に限らるゝと稱し(18) 屈服させられるのはギリシア人の權利に反する者であると考へられた。(19) 否自ら自由になる以上に他を支配せんとする欲求が伴つた。ペロポンネソス戰役についても「自由か隷屬か、そんな單なる結果だ考へてはならない。吾々は帝國を失はねばならない。」それがペリクレスの絶叫であつた。(20) 自由よりも寧ろ支配への要望がある。

五世紀の半ば過ぎには、自由も平等も、既に單なる「自由」「平等」ではなくなつて居た事が認めらるゝであらう。ペリクレスの死後にアテナイに來つたゴルギアスが、人事の最大最善とは、自らを自由にし、他を支配する力を與ふるに在ると言つ

た言葉は、當時アテナイに働いた、民衆の權力意志の發露ではないか。

ソロンよりペリクレスまでの間に次第に民主政治は發達した。とはいへ政治の實權を握り「人民の指導者」Prostates tou demou となつた者は、テミストクレスを除いては皆昔ながらの地主貴族か又は都會の貴族出身者であつた。[21] 又アルコンの任命には、事實は兎に角、表面的には、ソロンの規定に據る第四階級の者は決して與り得なかつたのである。[22]

それがデロス同盟によつて他の市を支配して以來高まれる支配的精神は、內政に向つても躍動し來つたのである。

「德とは人類を支配する能力である」[23]

といつたゴルギアスの言葉は、アリストファネスが

「アテナイの民衆は、今や人類の支配者だ」

と言へる章句と符節を合せて居る。[24]

海の民衆 Ochlos naukratikos が一般市民の間に伍して恥しからぬための教養が要求された時代のソフイストが、政治的技術の教授を使命としたとするならば、教養の如何を問はず、只管に他を壓倒する事、それを自由と正義との名の下に敢行せんとする氣分を、五世紀末のソフイストはその雄辯術を通して染め出して居るといひ得る。

個人的主我的、而して力を專らに揮はんとする、それが時代の姿であり、同時にソフイストの言說でもあつた。

(註)

1. Plat. Prot, 311–312　2. Pohlenz, Aus Platos Werdezeit. s. 193 ff. sophist が當初 rhetorik を教へた事に不贊成の樣であるが、自分は、それに不贊成を表したい。　3. Plat. Prot. 319　4. Plutarch, Sol. c. 4.
5. Burnet, Early Greek Philosophy. p. 46.
6. Plutarch, Themistokles c. 2.　7. Xenophon, Memor. II. c. 1 § 21.　8. Plat. gorg. 449.　9. 〃

Men. 956. 10. 〃 gorg. 511. 11. 〃 〃 453. 12. 〃 〃 444. 13. 〃, Philebos 58.
14. 〃 gorg. 449-452. 15. Grote Ⅲ. c. 31. n.
16. Herodotos Ⅲ. 80. 17. Plutarch, Aristides.
18. Aristoteles, Polit. I. 12559 19. Thukydides I. 98.
20. 〃 Ⅱ. 63. 21. Salin, Sozialismus in Hellas. s. 51.
(ヒーネイン記念論文集)
22. Aristoteles, Athenaiōn politeia c. 7, § 4. c. 26, § 2.
23. Platon, Menon. 73. 24. Aristophanes. Wespen. v. 518.

四　ノモスとフユシス—相對的立場

斯くの如き重大なるソフイストの運動を、各般に亙つて詳細に論ずる事は、小篇の及ぶ所ではない。吾々は此の時代の一つの特色ある論題であつた法(人爲 Nomos)と自然(Phusis)との問題㊀に限つて、之を中心として觀察して見たいと思ふ。

かく問題を限定しても、元來一つの集團的學派をなした者でもなく、從つて又その敎說を一定の型に於て理解する事は困難である。法と自然との問題に關しても彼等はそれ〳〵特異の見解を持して居る。例へば、

(一)　プロタゴラスは法を自然に對立せしめないのに㊁。

(二)　ヒツピアスの如きは人々は「法」によつてそれ〳〵の國の市民と分たれるのだが、本來は(自然に於ては)かゝる區別は存在しない㊂といふ意見を有し、法と自然とを對立せしめて居る。

又後者の如く、法と自然とを對立せしむる立場に於ても種々の差等がある。

(1)　アンヂフオンの如く法と自然との對立、自然の普遍と强力を說くに留まるものもあり、㊃

(2)　カリクレスの如く、强者の權を承認し、法を以て弱者の多數が自己の立場のために作製せるにすぎずとなすものある。㊄

人爲法の否定論者である。

(3)　或はトラシマコスの如く、自然の法によつて强者の權が存するのでなく、力のある所に法があるとなすものもある[16]虚無的な過激派と考へられる。

かくの如く、法と自然との問題についても各人各説であるが、大體について約言すれば、ソフイストは法を人爲として否定し去るものが多い。されば、プラトンも

ソフイストは法と自然とを對立せしめ、正邪の區別を無視せんとす

とその法律篇に概括して居る。[17]

元來此の法と自然との對立問題はイオニア學派に起つた。四季の變化、寒暖、生死といふ樣な對立から出發してやがて對立の背後の永久なるものが求められた。かくてその永久な、不老不死なるものを Phusis（本源、要素）と名けられたのであつた。[18]

然るに、ソクラテスの師と言はるゝアルケラオスは、始めて此の對立を人事について試みた。

正義と嫌惡すべきものとについては、それは本來(Phusis)ではなく　人間の掟(nomos)によつて定められる[19]

と稱した。之より以後、人事についても、好んで此の法と自然との對立が說かれる樣になつたのである。

ソフイストその者が、既に自然哲學的考察への絕緣を示すものである以上、イオニア以來の問題である、法と自然との對立についても、在來の意味に於いて重心がおかれてない事は認めなければならない。之を問題としたのは唯流行の題目を捕へ來つて、之を彼等の本領たる政治問題に適用したものと考へられる。

恒常な、不死不老なるものとしての自然、之に對立する所の變化、便宜、人爲をさして法と名け

た。此の對立の立場より政治論に及ぶ時は nomos の名に於て呼ばるゝ國法は、恒常不變なものではなく、人爲に出づる便宜の成果と見なさるゝ。國法否定の相對主義に墮する。特定の一國の政治、國法は絶對的のものならずとの見解に到達せざるを得ないのである。

かくの如き相對的の見地は、地誌家（logographoi）の報導や殊にヘロドトスの文明史的記述によつて助長された。各國の風俗の異同を記載して人々の見解を博大ならしめた。殊に政體については、ヘロドトスが民主政治、寡頭政治、專制王政をあげ、各々その支持者の存在を明かにした如きはそれである[10]。或は又人々が各々その國の慣習が最善と思惟する事をあげた。例へばギリシャ人は火葬を營み死骸を食する事は想像だにしない。然るにインド方面カラチア人には死骸を食する風があつて、火葬を反つて畏怖する旨を記載した。各人何れも自國の風俗を最良と信じ、その慣習から容易に離脱しえざるを示し、最後にピンダロスの句を誤り引いて

法は凡へてを支配する王だ

と說いて居る[11]。

かくの如き、絶對論への强き反駁的實證は、ソフイスト的思想から出て居ると思はれるが[12]一方に於て、ソフイストに向つて、反對に、有力な資料を提供したものだとも考へられる。ヒツピアスの如きも好んで各國の傳說を比較研究したと稱せられる。[13]程で歷史がソフイスト的立論の基礎に役立つた。

之を現實にひきなほして言へば、アテナイの民主政治についても、それのみが唯一最善の政體ではない事を曝露する。アテナイ人の自負心は迷妄であるといふ事にもなり、よりよき條件に於いては、現狀を作り換えても苦しからずといふ意味を

含む。更に極端に言へば、國法が正義の普遍的規範として幾許の權威ありやといふ抗辯ともなる。プラトンが正邪の區別を無視せんとすと批評したのも此の點についてである。

然し政治教育を其心からの生命と信じたプロタゴラスを始め、プロディコスやゴルギアス等の大ソフィストは始めからプラトンの批評した如く、正邪の別を無視せんとしたものではなかつた。

プロタゴラスの如きは、そのプロメテウスの神話によつても示さるゝ如く、正義は、人間にとつては普遍的な性質であつた。[14] 又强者の權を主張するものもその根柢にはやはり自然の正義をとき正義の觀念が基礎になつて居るのである。プラトン等と異なる點は唯

(a) 人間の法に從ふを正義とするか。

(b) 人間の法に從はざるを正義とするか。

に存する。而して此の差違點は、彼等の、歴史進

行についての思想より、換言すれば、此の場合自然狀態についての立場より之を論證する事が、極めて興味あるものゝ如くである。今少しく之を解說しておく必要がある。

(註)

1. Kaerst, Geschichte des Hellenismus I. s. 57.
2. Barker, Greek Political theory 62-63. も Burnet, Greek Philosophy 117. 等には彼は nomos 尊重主義と解するも、それは言ひ過ぎであると思はれる、Protagoras に就いては又別の機會に詳論したいと考へる。
3. Platon, Prot. 337. (cf. Xenoph. mem. IV. c. 4)
4. Antiphon については異論多きも今は Barker の附載せる (pp. 83-85) 斷片に據る。
5. Plat. gorg. 482
6. Plat. Staat I. 338, 348-349 等 Platon の理想共和國論第一卷は Thrasymachos を主題とせる獨立の對話篇であつたろうなどと稱せられる。(Wilamowitz, Platon II s. 181)
7. Platon, Gesetze, 889.
8. Burnet, Early Greek Philosophy pp. 8-10
9. Diogenes Laertios II. 16
10. Herodot. III 80-82
11. 〃 III 38
12. Dümmler, Kleine Schriften I, (Prolegomena zu Platons Staat u. der Platonischen u. aristotelischen staatslehre) s. 191.
13. Meyer, gesch. d. Alt. IV. 2 522.
14. Plat. Prot. 320—.